

(青虫) 「加筆版」



けん太君の叔父さんは、交通事故で目の中に入れても痛くないほどかわいがっていた末っ子の庄ちゃんを亡くしていました。それは自分が商売をしているお店の真ん前で起こったのです。

お店の真ん前で起きたことに、叔父さんは「商売にかまけて、どうして見ていてやれなかったんだ」と自分自身を責めさいなみました。

そうして叔父さんは自暴自棄になって、酒浸りになっては荒れ狂い、それが過ぎると今度は青菜に塩のごとくに意気消沈して、ふぬけのような状態になってしまったのです。

そのように叔父さんは、一時、家族の者も手のつけられない状態でしたが、たまたま近くに住んでおられるお坊さまのお話をお聞きしてからというもの、なにやら大いに感ずるところがあったようで、その後再び、あれほど「庄ちゃんの命を奪うきっかけになった」と忌み嫌っていたお店の商売に励むようになりました。

その叔父さんが、けん太君に常々言っていたのは

「庄五の命もけん太の命も叔父さんにとっては同じように大切なんだ。我が子、ひとの子の差はないんだ。生き物の命もみんな同じなんだぞ。人間の命が大切で、虫けらの命が粗末だということはないんだよ。だから、決して無益な殺生（せつしょう）をしてはいけないよ。蚊でも蟻でも成る丈、踏みつぶしたりしないようにしなよね」ということでした。

けん太君には「せつしょう」という言葉の意味は分かりませんでしたでしたが、恐らく踏みつぶすことなのだろうとけん太君なりに解き下しました。

そんなある日、けん太君が独り団地の公園のお砂場で砂遊びをしていた時、荷台の配達かごに野菜を積んだ八百屋さんの実用自転車がそばに留まりました。御用聞きのお兄さんが、公衆便所にも行くのか、とめていったのです。

その自転車をけん太君は見るともなく見てみると、ちいさな青虫が一匹、止めた自転車の後輪のスタンドを伝ってスポークの部分からタイヤの部分に移ろうとしているのが目に入りました。

瞬間、けん太君は、あのお兄さんが戻ってきて自転車をこぎ出したら、青虫は死んじゃう！と思いました。

しかし、けん太君は青虫に限らず、毛虫が大嫌いでした。見ただけで寒気がしてくるので、

ですが、このままだと青虫はぺちゃんこになってしまいか、細切れになってしまう。

「どうしよう？」

実は、けん太君の耳には、青虫を見た瞬間から叔父さんのしてくれた話が聞こえていたのです。

気持ち悪くてしかたない。でも、見たのに見てないふりをしたら？知っているのに、知らん顔したら？

けん太君は手のひらの内側が汗だらけになるのを感じました。心臓もどつくん、どつくん なっています。息が詰まりそうになりました。

すると、その時、わーっと言う大声と共にけん太君は、一気に、青虫を親指と人差し指でつまみ上げるやいなや、思いつき遠くに放り投げたのです。

けん太君は、その後まるで、50メートルダッシュを10本遣った後みたいに、はあはあと肩で息をすると、その場にへたり込んでしまいました。

手の中には、ぶよぶよの青虫の身体の感触が残っていました。

けん太君は、その感触を思い出すと、体中に鳥肌が立つのを感じ、その記憶をふりはらおうと、思わず頭を激しく振って

「あわわわわっ」

と、叫んでしまいました。

その後、夕日を背に、けん太君は家に帰りました。しかし、けん太君はその日の出来事を家の人には話しませんでした。

夕飯の後、けん太君はひとりでお風呂に入っているとき、さっきのことを何度となく思い出しましたが、起こったことややったことが今ひとつ自分でもよくわかりませんでした。

しかしその夜、けん太君は、お風呂から上がってから、何かとても言いしれぬ安堵感を覚えて、吸い込まれるように眠りに落ちました。

翌朝、けん太君は目をさますと、起こしに来たお母さんが

「けん太、おまえ夕べ盛んに、やったあ、できたあ、って何回も寝言言っていたけれど、一体何が出来たんだい？」

とけん太君に尋ねました。

けん太君は、お母さんの質問を聞いて、自分がそんな寝言を言ったことが、少し恥ずかしく思えたので、

「どんな夢かなんて、覚えてっこないよ」

と、ごまかしてしまいました。

しかし、お母さんが、台所に朝ご飯の支度をしに子供部屋を出た後、けん太君は、ちよっ

とにんまりしました。

それというのも、それまで絶対にダメだと思って逃げてばかりいた大の嫌いな毛虫をつかむ勇氣を持てたできたことが、溜まらなく嬉しかったからでした。誰かに褒められたりはしなかったけれど、得意なことをしてお父さんやお母さん、学校の先生に褒められたときよりも、ずっとずっと嬉しかったのです。

その後、小学校の高学年になったけん太君は「苦手の克服」という言葉を知りました。

しかし、あのときのことを思い出すと、あれは苦手の克服なんて言うもんじゃなくて、とっさに「決死隊員」にならなきゃ、とおもっちゃったからだだったのかもしれないなあ、と、何故か立派すぎるように感じられたその言葉を、こっそり心の中で書き直しました。